原稿 3.2004 – 26.5.2004
修正版 27.6.2004
初校 22.–23.6.2005
二校 20.–21.9.2005
出版? 受け取り 1.3.2006
(印佛研発表 24.7.2004 駒澤大学)

雪が焦がす

後藤敏文

長崎法潤博士古稀記念論集
『仏教とジャイナ教』抜刷
2005年11月

480–467
[351]–[364]

長崎法潤博士古稀記念論集
『仏教とジャイナ教』抜刷
2005年11月

雪 が 焦 が す

後藤敏文

1. “Zwei Jaina-Stotra” と題して，H. JACOBI, Indische Studien XIV（1876）359–391 は Bhaktāmarastotra と Kalyāṇamandistotra とよばれる詩編を写本に基づいて出版し，ドイツ語訳を付して紹介している。内容は Mahāvīra に先だつジャイナ教第23代教主 Pārśvanātha への讃歌である[1]。後者は JACOBI, LIENHARD の指摘によれば，前者をより標準的なサンスクリットを用いて模した作品であり，Siddhasena Divākara の作とされる。著者の素性も年代も不詳であるが，16 世紀に遡る注釈が知られているようである。その第 13 詩に次の歌が見られる：

krodhas tvayā yadi vibho prathamaṃ nirasto
dhvastās tadā bata kathaṃ kila karmacaurāḥ |
ploṣaty amutra yadi vā śiśirāpi loke
nīladrumāṇi vipināni na kiṃ himānī ‖

「怒りが君によって，支配者よ，最初に捨て去られたのならば，
その際，いったい，どのように，行為（業）という盗人たちが〔君によって〕粉砕されたというのか。
あるいはまた，かの（例の）地では，冷たくとも，
小黒い木々の森たちを，積雪が焦がしはしないか。」
（あなたは業というけしからぬ輩たち〔擬人化〕を滅ぼしたというが，怒りをもたずにどのような次第で可能であったのか。冷たい雪が木々を焼くということも，実際に見られるそうではあるが[2]。）

怒りが火として表象され，敵を焼き殺す，という観念は古今，インド内外を問わず広く見られる。これに対し，「雪（または冷たいもの）が〔木を〕焦がす，焼く」という表現は，木の葉が霜や雪に枯れると，火に炙られた時（あるいは，陽

に「焼かれた」時）に似た脱水・炭化の状態を呈することに基づくものであろうが，必ずしも予想される表現とは言い難く，注目される。

伝 Bhāsa 作の Trivandrum 劇中に有名な Svapnavāsavadatta「Vāsavadattā の物語，夢の巻」第5幕冒頭に見られる Udayana 王の独白の背後にも，「雪が焼く」という表現の存在が想定される：

ślāghyām avantinr̥pateḥ sadr̥śīṃ tanūjāṃ
kālakrameṇa punarāgatadārabhāraḥ |
lāvāṇake hutavahena hr̥tāṅgayaṣṭiṃ
tāṃ padminīṃ himahatām iva cintayāmi ‖

「アヴァンティー王の，誇らしい，〔父に〕似た愛娘〔のことは〕，
時の巡りによって再び妻を持つ身となった〔今の私〕は，
ラーヴァナカ〔の村〕で，火の神に細いその身（「身の棒」）を攫われた，
そのひとを，（時の巡りによって）水蓮が雪に打ち倒されたものと思いなす（としよう）。」

アヴァンティーの王女とは主人公ヴァーサヴァダッターのことである。ヴァッツァ族の宰相ヤウガンダラーヤナは王ウダヤナとマガダ国王の妹パドマーヴァティーとの政略結婚によって国を救うべく，ウダヤナ王の愛する后ヴァーサヴァダッターと自身とがラーヴァナカの地で焼死したものと偽装し，行者の兄姉に身をやつしている。この詩は王がパドマーヴァティーとの結婚を決意して歌う台詞である。水蓮の雪枯れと焼かれた棒とを重ねる連想の背景に「雪が焼く」という表現があるものと理解すると，詩の奥行きが一層よく理解できる[3]。

「雪が焼く，焦がす」という観念ないし表現が実際にサンスクリット一般に用いられたであろうことは，ミーマーンサー学派の Kumārila（7世紀）著 Ślokavārttika の次の行から推測される：

II 71cd–72ab *tr̥ṇādivikriyāhetor agnimaddhimasādhane* ‖
pratyakṣāvagatāc chaityāt tadviśeṣotthabādhanam（v.l. *tadviśeṣauṣṇyabādhanam*）|

「草などを変質させる（損なう）ことを根拠として，火を有する雪〔の存在〕を確認（論証）する場合には，知覚によって把握されている〔雪の〕冷たさに基づいて，それ（火）の特色付け（即ち熱さ）から生起する〔その論証の〕

排斥がある（または：それ〔火〕を特色づける〔性質〕である熱さが〔論証を〕排斥する）。[4]」

2. 冒頭に見たジャイナの Stotra 中に用いられる動詞語根 *ploṣ/pluṣ*「焼く，焦がす」は，殆ど古典サンスクリット（Kl.）に用例の限られる稀な語であるが，現在形としては，これまでに同箇所が知られるのみである：

Präs. I	*ploṣati*（同所のみ）［文法書[5]：IV *pluṣyati*, IX *pluṣṇāti*, *pluṣṇātu*, *pluṣṇāna*］
［文法書：	Aor. *apluṣat*; Abs. *pluṣṭvā*,（Kaus.）*ploṣitvā*］
VAdj. *pluṣṭa-*：	Rāmāyaṇa (*vi-*), Kl.(*pluṣṭa-*, *agni-pluṣṭa-* など：PW の挙げる用例のほか ViṣṇuSmṛti LXX 11; *ā-* もあり)，Purāṇa（*niṣ-*, *vi-* もあり）
Pass.	*pluṣyate* Suśruta
NDer.	*-pluṣ-*, *pluṣṭi-* SCHMIDT Nachtr., *ploṣa-*, *ploṣaṇa-*, *-ploṣin-*, *ploṣṭar-* Kl.
[*pluṣṭāyate*	Patañjali ad III 1,17:26,4]

中期および新アーリヤ語については，TURNER, A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages（1966）の *prṓṣati* の項に，Pkt. *pilosa-, pul°* 'burning' が，*plúṣyatē* の項に *paluṭṭha-, pil°, pul°* 'burnt'，Nepālī *pilisnu* 'to be burnt', caus. *pilsyāunu* 'to cook partially', Sinhalese *pulussanavā* 'to burn, roast, set on fire' などが挙げられている。

語義の厳密な確定には，Suśruta-Saṁhitā I（Sūtrasthāna）12 の記述が有益である。同章は Agnikarmavidhyadhyāya「火による治療法の章」と題され，患部を焼き除く方法を述べた部分である。焼かれた結果（*agnidagdham*）には *pluṣṭam*, *durdagdham*, *samyagdagdham*, *atidagdham* の 4 種類があるとされる。その中，*pluṣṭam* は *tatra yad vivarṇaṃ pluṣyate 'timātraṃ tat pluṣṭam*「その中，色が変わるまで限度を超えて焦がされると，それが *pluṣṭam* である」と定義される[6]。患部ないし焼きの施される部位の表面のみが「焼けた」場合を指すものと解釈され，語根 *ploṣ/pluṣ* の意味が「焦がす」にあたることを示している。後三者は，語からも定義からも，「悪く焼かれた」，「ちょうど正しく焼かれた」，および，「過度に焼かれた」状態を指すことが明らかであり，これらの場合，「焼かれた」深度

は表面に止まらない：*yatrottiṣṭhanti sphoṭās tīvrāś coṣadāharāgapākavedanāś cirāc copaśāmyanti tad durdagdham. samyagdagdhaṃ anavagāḍhaṃ tālavarṇaṃ susaṃsthitaṃ pūrvalakṣaṇayuktaṃ ca. atidagdhe māṃsāvalambanaṃ gātraviśleṣaḥ sirāsnāyusandhyasthivyāpādanam atimātraṃ jvaradāhapipāsāmūrcchāś copadravā bhavanti vraṇaś cāsya cireṇa rohati rūḍhaś ca vivarṇo bhavati*「ひりひり焼く痛み・赤い腫れ・膿み・痛みを伴ったひどい腫れ物が生じ，そして，しばらくして止む場合，それが『悪く焼かれたもの』である。深くまで潜行せず，パルミラヤシの果実の色（つやのある黒褐色）をし，形よく整い，先の（*durdagdham* の，または焼く前の）特徴を備えたものが『正しく焼かれたもの』である。『過度に焼かれた』場合には，肉が垂れ下がること，手脚の不整合，血管・腱・関節・骨の過度の損傷，そして，襲ってくる燃えるような焼く痛み・渇き・失神（意識混濁）が起こる。そして，その傷跡はしばらくの間成長し，成長が止まると変色したものとなる」。

他の用例も「焦がす」と解することができる。一例を挙げれば，Bṛhatsaṁhitā 94,36 *ūrdhvāgnipluṣṭe 'śanihate ca kāke vadho bhavati*「上の方が火に焦がされた〔木〕，および，落雷に打たれた〔木〕にカラスがいると，殺害が起こる」。

3. 語根 *ploṣ/pluṣ* の語源について，Mayrhofer, Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen [EWAia] II 193 s.v. *proṣ*（1993）は *prá* + *oṣ/uṣ* からのインド内部での発展形を想定している。*oṣ/uṣ*「焼く，焼き滅ぼす，燃やす」はヴェーダ文献群（RV–Sū.）にのみ見られる動詞で，現在語幹 *óṣa-*[ti] はギリシャ語 *heúō*「焦がす，燃やす」，ラテン語 *ūrō*「燃やす」と同起源の印欧祖語 *(h_1)*éu̯s-e-* に遡る。**prauṣati*（ないし**proṣati*）の用例は知られていないが，「焼き懸ける，焼き始める」の意味が予想され，「焦がす」の出発点になろう。仮にその展開を古インドアーリヤ語内部において考えると，次のような過程が想定される。Śatapatha-Brāhmaṇa から Śrauta-, Gṛhya-, Pitṛmedha-Sūtra にかけて，前置詞 *úpa* を伴って *úpoṣati* 等の語形が見られ（*samúpoṣanti* ŚB XII 5,1,17，*samúpoṣet* XII 5,1,13; 2,2 など），現在語幹 *-uṣa-*[ti]（第VI類）の見かけを呈するが，これは，例えば *úpauṣati, úpauṣet* (Taittirīya-Saṁhitā) の Imperfekt **úpausat*[7] から *óṣati* :: *áuṣat* のプロポーションに倣って作られた二次的な現在語幹と考えられる（Gotō, Die "I. Präsensklasse" im

Vedischen 109f. 参照)。前置詞 *prá* の場合にも同様の現象を仮定すれば **proṣati* が想定され，*ploṣati* はその *l*- 方言形と理解される。しかし，初出年代の遅さ，動詞形の少なさ，および，*l*- 方言形であること（中・新インドアーリヤ語も全て *l*- 形を示す。→ 注 8）を総合的に判断すると，中期インドアーリヤ語からサンスクリット化された語彙である可能性が高い。その場合，当然 *au* > *o* の変化を経ていたことになる。

4．ただし，印欧祖語には **preu̯s*「焼く，燃える」という語根が想定されており，もしこの想定が正しければ，同語彙が何らかの形でインドアーリヤ語にも保持され，古い言語に現れずに生き続けていた可能性をも考慮しておく必要がある[8]。この語根は今問題にしている *ploṣati* を一つの根拠として，一般に認められてきた：WALDE–POKORNY, Vergleichendes Wörterbuch der indogermanischen Sprachen II（1930）88, POKORNY, Indogermanisches etymologisches Wörterbuch I（1959）846 など，E. P. HAMP, “Another lesson from ‘frost’”（Journal of Indo-European Studies [JIES] 1, 1973, 215—223）222 および n.9 参照。しかし，*ploṣati* をひとまず置けば，実例はアルバニア語 *pruš*「炭火，赤熱」，ラテン語 *prūna*（< **prusnā-*[9]）「燠」，*prūrīre*「疼く」（おそらく Denom. 起源）などに絞られ，動詞形は見出されない。古インドアーリヤ語の遅い用例を，存在自体の疑わしいこの語根に遡らせることは困難に思われる[10]。

5．**preu̯s* と同形の語根は，印欧祖語にさらに二つ想定されてきた。**preu̯s*「凍る」，および，**preu̯s*「飛び散る」である。もし，「凍る」を意味する **preu̯s* の存在が確かであれば，今問題にしている「雪が焦がす」という表現は，失われた *「雪・霜が凍らせる」という古い表現の再解釈に基づく可能性がある。**preu̯s*「飛び散る」の方は古インドアーリヤ語 *proṣ/pruṣ*「弾け飛ぶ，滴る」（現在語幹 *pruṣṇáv-/pruṣṇu-*「飛び散らせる，滴らせる」）に受け継がれている。そこで，関連する諸問題を改めて検討したい。

「凍る」を支持する語彙はヨーロッパの諸言語に見られる：ラテン語 *pruīna*（< **prusu̯īnā-*[11]）「霜；Pl. 雪，冬」，ゴート語 *frius*，現代ドイツ語 *Frost*「寒さ，寒気；霜」（< **prusto-*），古ノルド語 *frjósa*，現代ドイツ語 *frieren*「凍てつく，凍る」

(< *preu̯se-) など；さらに，HAMP, JIES 1 219ff. によって，ケルト語からもウェールズ語 *rhew* 'frost', *rhewi* 'freeze' などがこれに属することが論じられている。

さらに，この *preu̯s 「凍る」と，*preu̯s「焼く」(→ 4.) との関係についても議論があった。WALDE–POKORNY II（1930）88は「寒さも，熱くて痒い感覚を引き起こす」という注記を付して同一見出し語中に収めており，POKORNY (1959) 846はこれを踏襲する。FEIST, Vergl. Wb. der gotischen Sprache（1939）169 s.v. *frius* ("ein stechendes Gefühl hervorrufen, frieren, brennen"), W.P. LEHMANN, A Gothic Etymol. Dic. (1986) 129 ("freeze; burn"), DE VRIES, Altnordisches etymolog. Wb.[2] (1962) 143 s.v. *frjósa* (POKORNY に基づき "ein stechendes gefühl hervorrufen"), WALDE–HOFMANN, Lateinisches etymolog. Wb.[3] (1954) 378f. s.v. *pruīna*, KLUGE–MITZKA, Etymologisches Wb. der deutschen Sprache ([21]1975) 219 s.v. *frieren*（「強い寒さと強い熱さとは同様の効果をもたらすことがある」）なども同様の見解をとる。さらにW. SCHULZE, KZ 56 (1929) 141＝Kl.Schr. 479 をも参照。しかし，その場合，原義は「鋭い刺激を感受する，ひりりと感じる」あたりに求められるであろうが，結果としての感覚を意味する語根から，原因となる「凍る」,「霜」,「焼く，燃える」などの自然現象を表す語彙が導かれるとは考え難い[12)]。寒さや熱によって引き起こされる感覚を表現する際の比喩的用語法はさらにまた別次元の問題である。

S. COSTA PARGA, Journal of Indo-European Studies 2 (1974) 94f. "Discussion concerning Eric E. Hamp's article on 'frost' in Vol. 1 No.2" は，印欧祖語 *preu̯s「焼く」と*preu̯s「凍る」とを論じた HAMP の上掲論文にコメントを加えたものである。彼女は，フランス語 *brûler*，スペイン語圏，特にアルジェンティンにおける「雪に焼かれた植物」という表現を基に，太陽が「焼く」ことと霜が「焼く」こととが農作業に同様の結果（被害）をもたらすことから両語義を橋渡ししようとしている。本稿の出発点となったサンスクリットの用例（→ 1.）はまさしくこの事情と比べられる。しかし，単語本来の意味に，脱水・炭化状態を表す抽象的な内容を想定することは思弁的に過ぎよう。語彙が成立するときの動機と，既成の語を用いて表現する仕方とは別次元の事柄と考えるべきである。COSTA PARGA の指摘する表現も，「焼く」という語を霜や雪の作用に比喩的に転用したものと考える方が自然であり，印欧祖語に「焼く」を意味す語根 *preu̯s の存在が疑わしい以上，さらにその比喩的用法が複数の語派に亘って「凍る」という意味のグループ

を形成したと仮定することには無理がある。

6. SEEBOLD, Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben（1970）211 s.v. FREUS-A- ‘gefrieren’ は，ゲルマン語の動詞 **freu̯s-e/a-* がもともと**preu̯s*「飛び散る」に遡り，“besprengen, spritzen”「（水を）撒く，かける」を意味したが，同語根から派生した名詞形が専ら「霧氷，霜」の意味で用いられた影響下で「凍る」に移行したという可能性を指摘している。この見解は KLUGE–SEEBOLD, Etymolog. Wb. d. deutsch. Sprache（^{22}1989）232 s.v. *frieren* にも引き継がれている。最新の Lexikon der indogermanischen Verben（RIX, KÜMMEL 他，^{2}2001）494（B. SCHIRMER 担当）は，これらの語を同じく **preu̯s* “sprühen, spritzen”「飛び散る」に帰し，「〔冷たい〕水をかける」＞「冷やす」[13)] から導こうとしている。この見解が正しければ，**preu̯s*「凍る」を設定する必然性も失われる。この語根に確実に遡るのは，既に触れたとおり，古インドアーリヤ語 *proṣ/pruṣ*「弾け飛ぶ，滴る」である[14)]。現在語幹は Nasalpräsens による faktitiv（使役的）語幹 *pruṣṇáv-/pruṣṇu-*「飛び散らせる，撒き散らす」である。用例はリグヴェーダ（RV）に限られ，「バターオイル，良いもの（*vásu*）をふり撒く，液体によって（Instr.）ものを（Akk. + *abhí*）濡らす」などの用例が見られる。さらに現在語幹 *pruṣāyá-ti* があり[15)]，主に「（…に向かって *abhí*）滴らせる，（…を [Akk. + *ā́*] 液体で [Instr.]）濡らす」の意味で用いられる。

7.「霜」等の語が **preu̯s*「飛び散る」に帰するか否かはを判断するに当たっては，古インドアーリヤ語 *pruṣvā́-, prúṣvā-* の解釈が問題となってきた。この語は，古くは「霜」と解釈され，これに相当する語形がラテン語 *pruīna* < **prusu̯īnā-*「霜；Pl. 雪，冬」の背景に想定され，**preu̯s*「凍る」の存在を支えてきた。しかし，語義としては先ず「露，結露した水（滴）」が考えられる。以下に *pruṣvā́-, prúṣvā-* の全用例を検討する[16)]：

7. 1. Atharvaveda (Śaunaka) [AV] XVIII 3,60（葬送の歌中）*śáṃ te nīhāró bhavatu | śáṃ te pruṣvā́vaśīyatām | śī́tike śī́tikāvati | hlā́dike hlā́dikāvati | maṇḍūkiy àpsú śáṃ bhuva | imáṃ súv àgníṃ śamaya* ‖「霧が君にめでたく現れよ。露（または，霜）が君にめでたく下りよ。冷たい（冷やす）〔植物？〕よ，冷やす作用をも

つ〔植物？〕よ，涼しませる〔植物？〕よ，涼しませる作用をもつ〔植物？〕よ，〔君は〕水たちの中でめでたく雌ガエルとなれ。このAgni（荼毘の火）を，うまく鎮めよ[17]」。

7. 2. Yajurvedaには，Aśvamedha（馬の犠牲祭）の馬について，次の二つのmantraが見られる：(1) *prúṣvā áśrubhiḥ*「涙粒たちによって露たちを〔ここに祭る〕」Vājasaneyi-Saṁhitā [VS] XXV 9–同 Kāṇva [VSK] XXVII 9,1, Maitrāyaṇī Saṁhitā [MS] III 15,8:180,2, ～ *aśrubhiḥ pruṣvām* Kāṭhaka-Saṁhitā Aśvamedha 章 [KSAśvam.] 13,10（Taittirīya-Saṁhitā [TS] V 7,20,1 の伝承は *áśrubhiḥ pṛ́ṣvām*）；— (2) *prúṣvābhyaḥ svā́hā*「露たちのためにスヴァーハー」VS XXII 26–VSK XXIV 12,1,（TS VII 4,13,1 の伝承は *pṛ́ṣvābhyaḥ svā́hā*），一般にTSの当該部分に依存すると判断されるKSAśvam. 4,2 の唯一の写本は *praṣṭābhyas svāhā*。

7. 3. Agnihotra（毎晩毎朝の熱した牛乳の献供）に関するbrāhmaṇa部分から：MS I 8,5:121,13 *avācī́naṁ sāyám ávamārṣṭi. tásmāt sāyám ávācī prúṣvaity. ūrdhvám̥ dívónmārṣṭi. tásmād ūrdhvā́ dívaiti*「下へと，夕べには（アグニホートラの献供に用いた柄杓を）拭い下ろす。それ故，夕べには，露（水滴）が下に降りる（下へ向いて行く）。上へと，日中は（つまり，朝のアグニホートラでは）拭い上げる。それ故，日中は，〔露・水滴は〕上へと行く（蒸発する）」；— 同 I 8,7:126,13（～ KS VI 6:55, 19, Kapiṣṭhalakaṭha-Saṁhitā IV 5:²51,10）*óṣadhayo barhíḥ. prúṣvāḥ prókṣaṇīr. díśaḥ paridháyaḥ*「（祭場に敷く）敷草は植物たちである。（供物等に）ふりかける水たちは露たちである。（Āhavanīya祭火を）囲む焚木たちは方位たちである」。

7. 4. Rājasūya祭の大王灌頂儀礼には様々な水が用いられるが，これに関してŚatapatha-Brāhmaṇa V 3,4,15 には *átha prúṣvā gṛhṇāti*「次に，露たち〔から取った水〕を汲む」が見られる[18]。より古い MS IV 4,1ᴾ:51,1 は部分の所有格を用いて表現している：*átha yát ⁺pruṣvāṇām[19] āraṇyám̥ tena*「次に，露たちの・から〔水を汲む〕場合，そのことによって〔祭主は〕荒野に属するものを〔自らの下に囲い込む *ávarunddhe*〕」。

7. 5. 要するに，Yajurvedaのマントラとbrāhmaṇa，およびŚrautasūtraに女性名詞 *prúṣvā-*「露，結露した水滴」が確認される。ただし，祭式文献の原型が成立した時点における地理的ないし季節的条件（当該祭式儀礼が行われた時期）から，上記の用例がもともと「霜」を意味した可能性も否定はできない。この語は

Atharvaveda ではアクセント位置を異にして _pruṣvā́-_ として現れる[20]。Taittirīya 派, Maitrāyaṇīya 派内部での伝承には異形が見られ(→ 注18, 19), 語形が早くから不安定になっていたことが窺える。

8. 接尾辞（ないし Ausgang, → 注25）_-vā-_ < _*-u̯áh$_2$-_ という特異な形成法から判断して, _prúṣvā-_ がラテン語の _pruīna_ < _*prusu̯īnā-_「霜；Pl. 雪, 冬」(→ 注11) と共通の古い語彙に遡る可能性は高い。その語彙成立時の動機を「露」,「霜」, あるいはその両方, の何れに求めるべきかは決定できない。語義の違いは天候の差異による意味展開, または選択に基づくと考えることができるからである (MAYRHOFER, EWAia s.v. 参照[21])。もともと「露, 水滴」と「霜」の両方を意味し得る語義があったと仮定すれば「凝結する, 凝結して現れる」のような意味が想定され, _*preu̯s_「飛び散る[22]」と結びつく可能性は大きい。言いかえると,「飛び散る」は,「(あちこちに) 凝結して現れる, 滴り出る」と厳密化され[23],「凍る」を意味する同音語を想定する必要はなくなる。即ち, ゲルマン語の動詞 _*freu̯s-e/a-_ は, SEEBOLD の指摘するように（ただし, 彼は語根および動詞語幹の意味を他動詞と解しているため, 全体を統一的に解釈することに成功していない), もともと「飛び散る」（正確には「滴り現れる」）を意味したが, 派生名詞がゲルマン語において（ラテン語, ケルト語においても）専ら「霧氷, 霜」の意味で用いられた環境下で「霜が降りる」, さらには「凍る」に特化したと解することができる[24]。さらに, このゲルマン語に見られる現在語幹と古インドアーリヤ語の現在語幹 _pruṣṇáu̯-_（_pruṣṇuvánti, pruṣṇute_ など)「飛び散らせる, まき散らす, 滴らせる」とを比較すると, 印欧祖語に本来 _*préu̯s-e-_「飛び散る」:: _*prus-néu̯-_「飛び散らせる」という vollstufiges thematisches Wurzelpräsens（fientiv-intransitiv):: Nasalpräsens（faktitiv-transitiv）という一対の現在語幹形成[25]があったことが跡づけられ, 以上の推定は一層強化される[26]。

8. 上記の解釈が正しければ,「凍る」,「焼く, 焦がす」, あるいはその両者を同時に意味するような語根を印欧祖語に想定する必要は無い。冒頭に見たジャイナのストートラ中の _ploṣati_ は, 語源的にこれらとは関係なく, _pra + oṣati_ の中期インドアーリヤ語形を背景にもつものと判断される（→ 3.)。「霜, 雪, 寒さが草木

を焦がす，焼く」という言い方は，植物を「干からびさせる，枯死させる」ことを比喩的に表現した表現レヴェルの問題であり，*ploṣati* の例や COSTA PARGA の指摘するロマンス(諸)語の表現（→ 5.）はこれに当たる。[27)]

注

1） Bhaktāmarastotra は，同じく Pārśvanātha に捧げられたプラークリットによる Bhayahara「恐怖を払う〔ストートラ〕」と並ぶ Mānatuṅga の作品。LIENHARD, A History of Classical Poetry, Sanskrit–Pali–Prakrit（1984）135 は年代を 5 世紀から 9 世紀の間に想定する。LIENHARD は Pt.J. VIDYĀSĀGARA 版（Kāvyasangraha, Calcutta 1888）に従い，“Bhaktacāmarastotra” としている。題名は，Kalyāṇamandistotra 同様，作品冒頭の語によっている。両作品はそれぞれ44詩節から成る。韻律はいずれも vasantatilakā。Kalyāṇamandistotra の最終詩節は āryā であるが，JACOBI 同所377は後の付加と考え，付加が疑われる前者の 1 詩節をも考慮して，両ストートラが元々43詩節から構成されていた可能性を指摘している。

2） *yadi vā* と *na kiṃ* の解釈には疑問が残る。JACOBI: “Wenn, o Mächtiger! von Dir der Zorn zuerst unterdrückt wurde, wie konntest Du darauf da noch, hei! die Thaten-Diebe vernichten? Sengt denn nicht aber auch hier（amutra!）in der Welt der Schneefall trotz seiner Kälte die Haine der Nîlabäume?（Ohne Zorn tödten, scheint ebenso widerspruchsvoll als das Sengen des Frostes.）”。JACOBI が “auch hier（amutra!）in der Welt” とする *amutra loke* は文字通りには「あの世で（は）」を意味するであろうが，*adas, amutra* が近称の事項を指す用例は古典サンスクリットに実際見られるようである。例えば，Abhijñānaśakuntalam V 11（王宮に入った苦行者の言）*mahābhāgaḥ kāmaṃ nṛpatir abhinnasthitir asau*「なるほど，この（件の）王（男たちの首長）は偉大な天分を持ち，不断に〔務めを〕堅く守ってはいる」，V 19 *mūrchanty amī vikārāḥ prāyeṇaiśvaryamatteṣu*「この（件の）変節は，専ら，権力に酔う者たちに，（形となって）現れるもの」。

3） M.R. KALE（second revised edition 1945）は *himena tuṣāreṇa hatāṃ dagdhāṃ padminīṃ nalinīm iva*「雪によって，〔即ち〕霜によって，打ち倒され，〔即ち〕焼かれた，水蓮（*padminī-*），〔即ち〕水蓮（*nalinī-*）のように」と正しく注記している。PURUSHOTTAM SHĀSTRĪ DATTAWĀDKAR の注（Ed. NARAYAN RAM ACHARYA, second ed. 1948）は *tuhinenākrāntām*「霜に襲われた」として，「焼く」ことには言及しない。

4） 山上證道，竹中智泰，黒田泰司，赤松明彦「Ślokavārttika, anumāna 章の研究

（II）—和訳と解説—」インド思想史研究 3（1985）24：『〔雪焼けによって〕草等の枯れたことを理由として「雪が火をもつこと」を論証するならは，〔そこには〕知覚によってすでに認識されている〔雪の〕「冷たさ」に基づいて，それ〔すなわち，火をもつこと〕の付加的特性〔である「熱さ」〕との矛盾が生ずる』。

5）Dhātupāṭha *pruṣ, pluṣ* 参照：I 735.736, IV 8.107（以上 “*dāhe*”）, IX 55.56（“*snehana-sevana-pūraṇeṣu*”）。

6）大地原誠玄訳，矢野道雄校訂『スシュルタ本集』第 1 巻（1993）35：『此中，甚しく焦げて悪しき色に変じたるものは焦性焼灼なり』。同訳は以下の 3 種をそれぞれ『不完全焼灼』，『完全焼灼』，『過度焼灼』としている。

7）* は実際には在証されていない復元形であることを示す。

8）*r* が優勢なインドアーリヤ語では，印欧祖語の **r* が逆に *l* で現れる例は少ない：*rei̯k$^{(w)}h_2$「引っ掻く」の場合は，RV は *r* 形をもつが，AV 以降 *l* 形が優勢である；ŚB *śvá-lucita-*「犬が引っ掻いた傷跡」などの背景に想定される*$h_3$reu̯k「掻き出す」（cf. MAYRHOFER, EWAia I 375f. s.v. *kuluñcá-*, RIX, KÜMMEL 他 Lexikon der indogermanischen Verben² [LIV] 307 s.v.）は事例が極めて少なく判断材料としては弱い；Yajurveda の散文等に現れる *lelā́ya*「揺れ動いている」は一般に *$h_3$rei̯H「沸き立つ，渦巻く」に帰される（cf. EWAia II 480 s.v., LIV 305f. s.v.）。中期インドアーリヤ語の所謂東部方言では，無論，*l* 形は優勢である，例えば，*lāja(n)-*（アショーカ王碑文 Kālsī, Jaugaḍa, Dhauli など）< *rā́jan-*「王」。

9）WALDE–POKORNY 88, POKORNY 846, HAMP, JIES 1（1973）221。さらに J. SCHMIDT, Zur Geschichte des Indogermanischen Vocalismus（1871）272 参照。

10）ラテン語 *prūna* は後述する語根 **preu̯s*「飛び散る（はぜる）」からの派生と解釈することもできる。特に *vi-prúṣ-*「火花，屑，しぶき（< 弾け散る・散ったもの）」AV, YS ＋ 参照。さらに，J. SCHMIDT 前掲書 272 頁上参照。あるいは，別の何らかの語根から，接尾辞 *-snā-* < *-sneh$_2$-（または，*-s-nā-* < *-s-ne-h$_2$-）によって作られた名詞とも考えられる，cf. *lūna*「月，月光」< *leu̯k-sneh$_2$- ～古インドアーリヤ語 *jyótsnā-*「月明かり，月夜」< *di̯áu̯tsnā- < *di̯eu̯t-sneh$_2$-。同様の事情はアルバニア語形にも伏在する。

11）SOMMER, Handbuch der lateinischen Laut- und Formenlehre（²1914）126, 164, 225（SOMMER/PFISTER, I, 1977, 103, 130, 171）, WALDE–HOFMANN, Lateinisches etymolog. Wb.（³1954）378f. s.v. *pruīna*（Lit.）, HAMP JIES 1（1973）217f., RIX, “Rapporti onomastici fra il panteon etrusco e quello romano”（Fs.Pallottino, 1981, 104–126＝Kleine Schriften 272–294）120（＝288）参照。

12）HAMP, JIES 1 222 も同様の指摘をしている。

13)　このような説明過程にも先行者があるものと思われるが詳にしない。MAYRHOFER, EWAia II 193 s.v. *proṣ*（1993）にはリトアニア語 *praũsti*「洗う」等に言及して "**(s?)preu̯s(H)*, 'beträufeln, mit（kaltem）Wasser besprengen, durch Wasser kühlen, waschen'" なる一節が見られる。

14)　他にスラヴ語の *-*sk̂é*- による現在語幹セルボクロアチア語 *pȑskām, pŕskati*「飛び散る，飛び跳ねる」など。さらに，注10 参照。

15)　語根 *proṣ/pruṣ* は派生形をも含めてヴェーダ文献にのみ現れる。上記の *pruṣṇóti, pruṣāyá-ti*（ともに RV のみ）の他，「滴る，飛び散る」という自動詞的意味で，*pruṣṇā-ti* (*pruṣṇánt-, pari-pruṣṇánt-* Yajurveda-Saṁhitā の Aśvamedha マントラ，*vy-apruṣṇāt* Vādhūla-Anvākhyāna IV), *vy-apruṣyat* ŚB が現れる。さらに，Aor. Fut. など若干の語形が見られる。VAdj. は *pruṣitá-*（RV）であり，*pruṣāyá-ti*, *pruṣṇā-ti* とともに seṭ 語形を示すが，その由来は不明である（→ 注22）。

16)　以下に触れる諸点は GEROW, JIES 1（1973）224–231 が HAMP の論考を捕捉する形で取り上げている。しかし，同論文には，Text・内容・言語に亘る理解，論理その他の点で，極めて不満が残る。

17)　AV写本には特に異読なし。～ Taittirīya-Āraṇyaka VI 4,1 *pŕ̥ṣvā* (v.l. *pŕ̥ṣṭā, pŕ̥ṣṭhā*)。c–f の基になった詩節は RV X 16,14 *śī́tike śī́tikāvati ¦ hlā́dike hlā́dikāvati | maṇḍū-kiyā̀ sú sáṃ gama ¦ imáṃ suv àgníṃ harṣaya ‖*「冷たい（冷やす）〔植物？〕よ，冷やす作用をもつ〔植物？〕よ，涼しませる〔植物？〕よ，涼しませる作用をもつ〔植物？〕よ，雌ガエルとうまく番え，この Agni （荼毘の火）をうまく喜ばせよ」。

18)　～ Kāṇva 派 VII 2,2,13, cf. Kātyāyana-Śrautasūtra XV 4,33（Ed.によっては35, 38）。Baudhāyana-ŚrSū XII 8:97,11 ... *iti pr̥ṣvāḥ* は Taittirīya 派の語形による。同じく T 派の Āpastamba-ŚrSū XVIII 13,13 *pruṣvāṇām*（写本 *pr̥ṣṭānām, pr̥ṣvānām*〔或いは *pr̥ṣṭhāṇām* か印刷不明瞭〕），Hiraṇyakeśi-ŚrSū XIII 5,14（Ed. *pr̥ṣṭhānām*）は対応行作を部分の所有格によって述べる。上記 **7.2.** に挙げた TS の 2 例，前注の TĀ など，Taittirīya 派は一貫して *pr̥°* という語形を示す。同派の *r̥* の発音が *ru* に近かった事情を反映するものと思われる。CALAND, Über das rituelle Sūtra des Baudhāyana（1903）66, BLOOMFIELD–EDGERTON, Vedic Variants II（1932）312, DEBRUNNER, AiG I Nachträge 19: 31,18, KUIPER, Kratylos 33（1988）171参照。MS I 8,5p:121,13 (→ **7.3.**) は正しく *prúṣvā* と伝承。

19)　Ed. v. SCHROEDER, Ed. SĀTAVALEKAR ともに *púṣpāṇām*（異読なし）。同派の Mānava-ŚrSū IX 1,2,36 も，Ed. KNAUER, Ed. v. GELDER ともに *puṣpānām* と校訂 (Mss. puṣyānām); Vārāha-ŚrSū III 3,2,21 の写本も *puṣpāṇām*。CALAND, WZKM 23

(1909) 56 = Kl.Schr. 177, CALAND–RAGHU VIRA の VārŚrSū への脚注は *prúṣvāṇām* に訂正すべきことを指摘している。Maitrāyaṇīya 派では，MS の伝承の古い段階で *púṣpāṇām* への誤りが起こり（無論 *púṣpa-*「花」への連想が働いたものと思われる），同派の ŚrSū. に反映されたものと考えられる。MITTWEDE, Textkritische Bemerkungen zur MS (1986) 166 の同所に対する考察（TS 語形についての判断，“Blumenwasser” など）は的が外れているように思われる。これに対する KUIPER, Kratylos 33 (1988) 171の批判をも参照されたい。

20) **prus-u̯áh₂-* という構造上の理由から，AV に見られる語末にアクセントを持つ形が歴史的語形と判断されるが，Yajurveda の 3 学派が揃って語頭にアクセントを示すことから判断して，*prúṣvā-* が実際の語形であったこと（Sprachwirklichkeit）も否定できない。AV の *pruṣvā́-* が「霜」，YV の *prúṣvā-* が「露」というように，アクセントによって（二次的に）意味の区別がなされた可能性もあるが，少ない用例からは判断できない。

21) MAYRHOFER, s.v. *pruṣvā́-* は，Kurzgefasst. etym. Wb. II 381 (1959) においては “Reif, Rauhfrost, Eis” という語義から出発して，“*pruṣṇóti* ‘beträufelt’” と **preu̯s*「凍る」，「焼く」との間を揺れる記述をしているが，EWAia s.v. (1993) では “Tautropfen, kühler Tropfen” と語義解釈を改め，*proṣ*「飛び散る」に属するという態度をより鮮明に打ち出している。

22) seṭ の外見を呈する語形（→ 注15）が現れること，中期インドアーリヤ語の語頭に *ph* をもつ語形，ラトヴィア語の *s*-mobile を伴う語形をも考慮して，MAYRHOFER, EWAiaは復元に慎重を期し，**(s?)preu̯s(H)* としている（→ 注13）。しかし，「飛び散る，弾け飛ぶ」という意味の場合には，擬音・擬態による特別な音変化は十分予想され，出発点としては **preu̯s* で問題なかろう。

23) 「飛び散る」の本来の意味が「(あちこちに) 凝結して現れる，滴り出る」であったのか，後者は前者の用例の一つであったのかは決定できない。

24) **6.** に挙げた「〔冷たい〕水をかける」＞「冷やす」から導く仮説（LIV）は，語根の意味がもともと自動詞（fientiv-intransitiv）と考えられる点からも採り難い。古インドアーリヤ語の所謂第一類現在活用にあたる vollstufiges thematisches Wurzelpräsens は動作の起こる時間幅をいわば引き延ばして表現する機能を但うだけであり，そのような意味要素（Verhaltensart, Rektionsart）を変換する機能はない。

25) Nasal-Infix-Präsensによる *právate*「清まる」:: *punā́ti*「清める」のタイプ が知られている：T. GOTŌ, Die “I. Präsensklasse” im Vedischen (1987, [2]1996) 61f.。目下の場合には，Nasal-Infix-Präsens (**pru-né-s-*) の代わりに *-néu̯*-Präsens が用

いられている。この *u̯ 要素が *pruṣvā́-/prúṣvā-*，ラテン語 *pruīna* < **prusu̯īnā-* に見られる *-u̯- と関連する可能性は否定できない，cf. *dhánutar-* :: *dhánuva-ti*「走る，流れる」，*tárutar-*, *tarutár-* :: *tū́rva-ti*「凌ぎ越える」，Gotō, I. Präs. 164 n.262, Tichy Nom. ag. auf. *-tar-*（1995）41参照。

26) Kluge–Seebold, Rix–Kümmel–Schirmer（→ **6.**）はこれらの現在語幹そのものには言及しながら，単なる列挙に終わっている。*pruṣvā́-/prúṣvā-* の語自体についての Hamp の語源解釈には曖昧な点があるが，「飛び散る」に遡らせているようであり（p. 216），彼は3つの同形語根を想定していることになる。

27) このような表現方法が他の言語にどの程度見られるかということはそれ自身興味深い問題である。日本語の「霜焼け」は冒された皮膚部分の感覚を謂うものであるが，「焼く」という語彙に「疼く」という意味が元々あるのではなく，「焼く」を比喩的に転用した表現上の問題である。「雪に焼ける」，「雪焼け」の場合には色の黒さについて「陽に焼ける」から転用したものである。なお，*dah*「焼く」，VAdj. *dagdha-* が雪や霜について用いられる用例（cf. 注3）は事実上見出されなかった。

（ごとう・としふみ　東北大学教授）